特 203
781

信仰讀本

中村辨康著

文庫
第一輯

始

特203
781

著者近影

はしがき

信仰に入りたいと思つて居る人はかなり澤山ある。

然し、それに應ずるやうな書物のなかつたことは甚だ殘念であつた。

誰か書きさうなものだがと思つて居たが、いくら待つて居ても出て來さうもない。

しびれを切らして、終に書いて見たのが、これである。

もとより不文であり、意を盡くすことも出來ないが、なるべく簡潔に、そして自由に、奔放に書きたいと思つた爲め、意餘つて力及ばず、頗る不出來なものに

昭和九年四月二十二日

なつて仕舞つた。

思ふに宗教は單なる學でもなく、思想でもない。

何處迄も體驗を要求するものである。

本書が少しでも多くの人達への求道の示唆となり刺戟となり得るならば、筆者の幸福は此上もないと考へて居る。

一昨年二十歳になる次男が死んだ。其の臨終の二日前に話したものも、大概こんな事であつたが、彼は納得して死んで呉れたのであつた。

若い命が死の直前に微笑んで合掌して呉れた姿が、まだマザマザと眠の底に殘つて居る。聽く者も眞劍であつた。語る者も眞劍であつた。

今ま稿成つて其時の氣持が思ひ出される。

願くは本書が眞劍な氣持で、多くの人々に讀まれ、そして少しでも納得して貰へることが出來たら彼もどんなに喜んで呉れるであらう。

私はこんな氣持で唯だ合掌して本書を皆樣の前に贈るものである。

昭和九年十月

著者

信仰讀本

目次

第一章　悟りと救ひ……一
人の望みと現實生活―何か根本的に誤つてはゐないか―日本所產の佛敎
―悟りの佛敎と救ひの佛敎―佛とはめざむるもの―抑止されない人間の
本能―信仰に依る精神轉回

第二章　宗敎と人間の望み……二
悠久たる天地―偉大なる人間の精神力―先づ欲求の整理―光りを求めて
―人間の求むる世界―死んでもいのちが欲しい―若い時こそ大切―宗敎
こそ人生の謎を解く鍵―不死の自覺―明るい生活―阿彌陀と云ふこと

第三章　信ずる心もち……三五

目次

佛を目がけて—道を求むる心—願ひ求むるこゝろ—深みのある心—佛への轉向—一以て貫く至誠の心—生きてゐる信仰—榮養と生殖—灰になつて行く無我の心

第四章　信仰の本尊……四五

條件に依る變化—條件の整理—全緣綜合の力—天地に充つる活力—釋尊の拜んだ本尊—救ひの爲めの佛—釋尊の目的—阿彌陀佛は果して存在するか—永遠に變らざるもの—啐啄同時—場所と方向とは必然なもの—信仰に依てのみ味ひ得らる

第五章　信仰を得る道……六一

考へるよりは實踐—聲は行爲の決定—信仰なき者も稱名に依れ—南無のこゝろ—もし偽きが來たら—入信の因緣—懺悔の涙は信田の肥料—天地悉く皆な新らたなり

信仰讀本目次終

信仰讀本

中村辨康

第一章　悟りと救ひ

人の望みと現代生活

人々は皆幸福を望んで居る。然し、事實は豫期に反して、寧ろ苦惱にさへ喘いで居る。

朗らかな、明るく樂しい人生と云ふものは無いであらうか。

經濟に、家庭に、環境に、

兎もすれば憂欝にさせられるのが、果して人間生活の常態なのであらうか。

昆蟲のやうな無感覺同樣なものならいざ知らず、鋭敏な感情を持ち、發達した理智を所有して居る現代人は、昔の人達より却つて一層苦勞が多くなつて居るのではないかとも思はれる。

是では文化の進みも、凡そ意味をなさない事にならう。

何か根本的に誤まつてはゐないか

一般に人間の幸福要求は、本能と云つてもよい位、根深いものである。

そして丁度、火取虫が火に飛び込んで、身をこがして居るやうに、渦卷く苦惱の濁流の中に溺れつゝ、幸福に向つて渾身の努力を續けて居る。

然も私達の一生は、其目的を遂げる事もなく空しく過ぎ去つて行くのである。

之では「生れざりせば」の歎も、決して無理ではない。

だが、之は何か根本的に誤つた考へを、私達人間が持つて居るからではないだらうか。

少くとも古來の宗教家は、皆な人生をよろこび、人生にいそしんで居た。

其處に何かしら、私達と異つた考へが、考へられて居たのではなからうか。

古來の信仰深い人達が、本當に人生を喜んで居たとすれば、私達と雖も宗教に依て人間としての根本的な欲求を、解決し得られない筈はない。

日本所産の佛教

然し、宗教にも色々あつて、夫々異つた特色もあるではあらうが、中には科學の發達に依て、丸で問題にならなくなつたものもあるから、宗教でありさへすれば、どれでもよいと云ふ譯には行かない。

世界の三大宗教の隨一と云はれる佛教は、人間の目醒めを要求して居り、ことに優

秀な世界に誇るに足る程の、日本の文化を産んだ事實があり、そしてまた私達日本人に最も親しいと云ふ點から云つても、之を充分研究して見る義務がある。

成る程、佛教は印度に初まつたものではあるが、我國に於て最も異常な發達を遂げたのである。

聖德太子が「大乘相應の地」と云はれたのも、所以ある事だと思ふ。

然も現に行はれて居る佛教は、いづれも日本所産のものであり、いづれも日本的特色を持つて居るものである。

わけても淨土教系のものは、全國佛教徒の約半數を有して、其思想は信仰の有無に拘らず、一般通念として、我が國民性の中に浸潤してさへ居る。

平安朝に起つたものは、まだ支那傳來を誇りとして居た丈に、純粹な日本產とは云へないが、鎌倉初期に興つた法然上人の淨土教は、支那からの傳統もなく、佛教の一大革命でもあつた。そしてそれは本當に日本の產んだ純粹の宗教であつた。

今迄の高遠なこむづかしい理屈を捨てて、平易な信仰に依て、佛教の目指す目的を遂げしめんとするものであるから、簡潔を好む我國民性にもピツタリ一致するものがあつたのである。

悟りの佛教と救ひの佛教

無論教理研究と云ふことも、興味のある事であり、且つ人々の理智を滿足せしむる上に、大切なものではあるが、人間の心に情意と云ふものがある限り、そして其情意が、人々の幸福に就て、非常に深い關係を有するものである限り、單に理智の滿足丈では本當の幸福は得られる譯もない。

情意と理智と相俟つて、双方共に滿足する時、初めて、本當の幸福、本當の平安が得られるであらう。

悟りは理智から入り、信仰は情意からいる。

然し、悟りも、結局、情意を滿足せしめ、信仰も、終に理智を滿足せしめるものだから、畢竟表裏の相違に過ぎないやうにも見えるが、其性能に至つては全く違つて居るものがある。

即ち一方は成佛を目指して居り、一方は往生を目標として居るからである。

成佛は人を中心とし、往生は場所を中心とする。

場所は環境であり、社會であり、世界である。

理想的な環境の中に飛び込むのと、自ら環境を作り出すのとの相違である。

佛とはめざむるもの

一體佛と云ふのは、日本流に云へば「めざむるもの」のことで、自ら目醒るのみならず、他の人々をも目醒ましめ、且つその目醒めを絶えず實行して居る人のことである。

一般には「成佛」の準備行爲として、戒律に依て生活を淸め、禪定に依て一切の邪念を拂ひ、然る後、眞實の智を悟つて「佛」を完成すると云はれて居るが、それは非常な努力が要り、普通では容易に徹底した大悟大智には至り得ないものである。

抑止されない人間の本能

つまり人間は遺傳や、習慣や、動物的本能などに依て、根本的に誤つた考へを持つて居るから、その根本的なものを「悟」に依てスツカリ是正しなければ、本當に苦惱から脱却する事は出來ないと云はれてゐる。

然るに理智の上の謬見訂正はとにかくとしても、動物的な本能から來る色々な間違つた欲求は、容易な事では抑止することは出來ない。

然も、それは人間が生活して行く上に、或る程度迄必要なものであり、且つ外には色々な誘惑もあるから、適度を越えざる範圍に於て、それに打ち克つて行くことは全

く困難で、誰にも出來ると云ふ譯には行かないのである。

信仰に依る精神轉回

然るに信仰に依れば、その燃ゆる情熱に依て、人格を一變させて仕舞ふ事が出來る。

丁度、細胞の中心たる核が死ねば、細胞の全體が死滅するやうに、人格轉換に依て容易に謬見が破れ、すつかり生れ更つた人となれるのである。

卽ち如來を信ずることは、宗教的感情が新らしく生れ、次第に情操が養はれて、終に精神改造が行はれるからである。

智惠もいらず、才覺もいらず、戒行もいらず、禪定もいらず、唯だ信ずることに依て、人間を幸福にし得ると云ふことは、誠に至極簡單である。

つまり、一度、軌道に乘れば、たやすく進行が續けられるやうに、淨土教に依る信仰は、容易に其人を理想の世界に進ませて呉れるのである。

だから之を「往生」の教へとも云ひ、「救ひ」の宗教とも云つて居る。

誠に淨土教こそは、本當の正しい信仰への大宗である。

佛教
- 悟り（哲理究明）――難行（聖道門）
- 救ひ（信仰獲得）――易行（淨土門）

第二章　宗教と人間の望み

悠久たる天地

天地は悠久である。

無限のむかしから、無限の將來へと、盡くるところを知らない。

あの夜空に輝く星の數々が、みんな晝間見る大きな太陽と同樣に、夫々、光と熱とを持つて、地球のやうな幾多の遊星を引連れつゝ、一つの世界を形成して居ると云ふではないか。

そしてその幾多の世界の集合が、所謂、天の川であり、その天の川が、どの位の大きさかさへ、殆んど想像がつかないのに、その天の川以外にも、かうした澤山な恒星の集合が、まだあるかも知れないと云ふに至つては、實に天地の廣大にして無邊際なること、驚くばかりである。

そしてまた其れは時間の上にも盡くる處がない。
實に宇宙は悠久であり廣大である。
然るに、人間は餘りにも小さく、餘りにも短い存在である。

偉大なる人間の精神力

然し乍ら其の小さい人間の精神力は、これら廣大にして無邊、悠久にして無限なる天地を、研究し究明し得るから不思議である。
是れ亦、誠に驚歎に値ひすべき大事實ではないか。
然かもこの偉大なる人間精神を、更に一段飛躍せしむるものが、宗教の信仰である。
此故に信仰こそは、實に悠久にして廣大なるものゝ、最も偉大なる極限である。
だが、信仰は極めて小さい處から初まる。即ち、脚下を照顧して自分の前途に、大波瀾を卷き起すものである。
名譽も、金錢も、本當の幸福を齎し得ない苦い經驗から、何とかして此の苦しい境地を脱却したいと、藻掻き初めることに依て、終に人間最上の幸福と、眞實なる生命とを發見するに至るからである。
之こそ人間として最も眞劍に考へなくてはならぬ大問題であらう。

先づ欲求の整理

私達の欲求には色々なものがある。
數へ上げて見たら、どの位あるか分らない。
然し、段々整理して行つたら、結局現在を「よりよくしたい」と云ふ一事に歸着して仕舞ふ。
更によく考へると、「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」と云ふ言葉もあるが、夫

は餘程の達識の人でなくては考へられない事で、一般には、いくら現在が好くなつても、直ぐ死んでしもふのでは、拙らないと思ふものだから、「よりよくなりたい」と云ふ望みの外に、「より永く生きたい」と云ふ要求も強い筈である。

否な、「より永く生きたい」ことの方が、「よりよくなりたい」欲求よりも一層痛切かも知れない。

「よりよくなりたい」のも、畢竟「生きて」の上の望みに過ぎないからである。

いづれにしても此の「向上」と「永生」との二つは、人間の最も根本的な欲求である。

光りを求めて

事實、向上を望む心から、日常の色々の欲望も生れて來るものである。

學問も、藝術も、道德も、この心がなかつたら發達する筈がない。

此の心があつて、初めて社會も國家も發達し進展するのである。思想の進化も文化の發達も、皆な此の心に起因して居る。

この心は「無限の光」を求め、「無限の明るさ」を求める原動力である。

そして之は人間ばかりでなく、生物と云ふ生物が、皆んな此の心に傾向づけられて居るから頗る奇妙である。

「適者生存」などと云ふ理由丈では、此の最も嚴肅にして眞劍なる事實を解釋する事は出來ない。

それは餘りにも淺薄である。殊に人間の尊き向上心を批判するには餘りに情ない言葉である。

人間の求むる世界

人間の求めて居る世界は眞善美の世界である。

そしてその世界は、最も神聖なる世界である。
「適者生存」以上の尊貴なる世界である。
眞實の世界。
其處に私達の理想がある。
至善の世界。
其處に私達の願望がある。
至美の世界。
其處に私達の憧憬がある。
かうした私達の理想への要求は、少くとも崇高にして尊貴なるものである。
この要求は科學では解決出來ない。
哲學でも到達することは出來ない。
藝術や道德でも達成することは出來ない。

唯だ宗教に依てのみ至り得る世界である。
或は「それはユートピヤであり夢である」と笑ふものもあるかも知れない。
然し事實は凡ての人間が、一歩でも常に其れに近付かんとして居り、また、少しでもそれに近付くことが、全人類の幸福である譯でもある。

死んでもいのちが欲しい

また「永生」への希望は、あらゆる生物の持つ眞劍な欲求である。
然るに、人間には、五十年か七十年の制限があり、「永生」の希望も肉體的には實現不可能の問題である。
だから「生死」と云ふ事は、人間に取つて一種の謎である。
だが謎を謎の儘にして置いてよいだらうか。
然し、人々は謎の解答を求めやうともせず、唯だ徒らに大きな恐怖を抱いた儘、一

歩一歩、死の深淵に近付きつゝあるのである。

「門松は冥途の旅の一里塚」と云ふ言葉もあるやうに、毎日毎日冥途への旅行を續けて居るのが私達である。

「人々は大いに爲して居るつもりで居るが、其實はみんな墓場に急いで居るのである」と或る哲人が云つたが、考へて見れば正にその通りで、實に恐ろしい人生の旅路である。

若し此問題が解決されたら、人間の世界はどの位、朗かになるか分らない。

人間の幸福。

人生の價値。

これ等の本當の事が味ひ得られたら、私達の生活も其の喜びの爲に一變するに相違ない。

無量壽への憧れ。

これこそ人間の一番眞劍な祈りである。

向上心と云ふことも、結局此中に包含される。

「命あつての物種」と云ふ言葉もあるではないか。

よしそれが利己的な考へから、出て居るにもせよ、あらゆる生物が、皆んな共通な本能として持つて居る氣持である。

若い時こそ大切

若い人達は「我々は若い。我々は青春に富んで居る。そして若い時は再び來ない。だから今から年寄り臭い生命の問題など、考へたくない」と云つて、此人間の大きな謎を取上げやうともしないが、それは餘りに無反省すぎはしないか。

いくら若くても「いのち」は刻々に減つて行くのだ。

否な寧ろ若い時に解決して置く可き重大な問題なのである。

此問題が解決して居なければ、誰にしても碌な仕事は出來はしない。徹底と云ふことも、之が解決して居ればこそ出來るのである。

若い者が不徹底で居てよいと云ふ譯はない。

春秋に富んで居て、しかも人生に徹底して居れば、鬼に金棒の强さである。

年寄つてから徹底したところで、もう遲い。他人からは老人の大平樂ぐらゐにしか見えはしまい。ないよりはましだが、其價値から云つたら餘程割引される。だから若い者にこそ、此の問題の解決は最も必要なことである。

宗教こそ人生の謎を解く鍵

宗教は、この通常では解決の出來ない人生の重大問題を解く妙鍵である。

悟りの佛教でも、救ひの佛教でも、畢竟は此問題を解決して、永遠の生命に對する自覺を得、向上進展に對する確信を得る處に、其の目的があるのである。

成佛と云ふことを、別の言葉で「涅槃を證す」とか、「正覺を成就す」とか云ふのも結局は此の問題を解決する事を云つたものである。

不死の自覺

「涅槃」と云ふ事は、煩惱の火の消えたこと、煩惱の風の吹き止んだ狀態を云つたものである。

思ひなやむべき根本の原因が明かにされて、「我」と執着すべき理由のない事を、本當に悟つた境地である。卽ち不死不滅の自覺を得た事である。

然し理屈の上からは「なる程さうだ」と云はれ得ても、生活の事實は中々その通りにはなれないから、古への聖者達は、非常な苦心努力を拂つて其體驗に修養を盡くしたものである。

既に本當に「無我」が體認さるれば、肉體の生きるとか死ぬとか云ふよりも、生

活が積極的に純粋に生きることに、正しい「いのち」を感じて、終に不生不滅の本據に直參することが出來るやうになるのである。

是れ卽ち「無量壽」への歸一である。

明るい生活

また「正覺」と云ふのは、委しくは「無上等正覺」と云つて、行詰りのない正しい覺醒の道のことである。

私達には「我執」「我慢」「我愛」などがあつて、之が爲に色々な惑ひがあり、色々な昏迷がある。

之が爲に前途は暗澹として判明せず、兎もすれば運命論者になつたり、或はやけくそを起したりするやうになる。

少しばかり順境だと直ぐ有頂天になり、ちよつと逆境に入ると、悲觀のドン底に落込んで仕舞ふ。

何のことは無い。丸で風に弄ばれて居る鳥の綿毛のやうな有樣である。

かうした馬鹿馬鹿しい暗い迷路を脱して、明るく朗かな、所謂明鏡止水の境地になるのが、「正覺」を得たことで、つまりは「無量光」へ歸一することである。

阿彌陀と云ふこと

是等は悟りの佛教で云ふ所のものであるが、救ひを中心とする信仰の佛教では、之を阿彌陀の三字の中に發見し、そしてそれを完全に滿足成就し給ふ如來に、歸命し合掌歸一せんとするのである。

卽ち「阿彌陀佛」と云ふのは、その無量壽無量光を完成した佛のことで、「阿彌陀」とは一切が無量であり自由であると云ふ意味である。

この一切の自由を完全に持つて居る佛こそ、私達の最も頼むに足る佛である。

だから楞伽經にも「諸佛の淨土は阿彌陀佛國中より出づ」と云つて居る。つまり、「阿彌陀」を得ることなしには佛になれないことを云つたのである。

私達が信仰上、阿彌陀佛に「南無」するのも、人間欲求の最大なるものの「永生」と「向上」との二つを、無量壽、無量光として完全に具備し給ふ如來であるからである。

私達の希望要求にピツタリ應同するものは、阿彌陀佛より外にはない。此故に私達が「阿彌陀佛」に「南無」する時、私達のやる瀬ない氣持は、自然に一種の落つきを覺えて、何となく、長閑にもなるのである。

此意味に於ても、淨土教の信仰は人間的なものである。

況して、信仰體驗に依て、本當の人生を喜ぶことを得るに於てをやである。

成佛〔涅槃——無量壽——永遠不死〕〔正覺——無量光——無限向上〕阿彌陀（無量）

第三章　信ずる心もち

佛を目がけて

人間である限り、佛を目掛けて居ない者はない。

佛の內容は「覺醒」であるからである。

宗教否定論者と雖も、此意味に於て、畢竟お仲間に過ぎない。

人間として無量壽と無量光とを望まないものが、何處にあらう。

だから、人間は廣い意味での念佛者である。

少なくとも佛教徒は皆な「南無佛」の感情を持つ。

佛教徒たる資格は「歸依三寶」にあるからである。

三寶とは佛寶と法寶と僧寶とである。

佛寶とは「覺醒」の原理である。木佛金佛ではない。

法寶とは「覺醒」の規範である。黄卷折本ではない。
僧寶とは「覺醒」の生活である。圓頂黑衣ではない。
「めざめ」を悟り、「めざめ」を學び、「めざめ」を活かす、是れ、佛敎徒の理想であり、「歸依三寶者」である。
人々はそれを知ると知らざるとに拘らず、皆なかうした氣持を持つて居る。
誰れも彼れも「南無佛」者であり、「南無法」者であり、「南無僧」者である。
然し人間に取つて一層切實なものは「南無阿彌陀佛」である。
「南無佛」よりも「南無阿彌陀佛」の方が一層明確である。
「南無法」よりも「南無阿彌陀法」の方が一層切實である。
「南無僧」よりも「南無阿彌陀僧」の方が一層直接である。
「阿彌陀」とは無量壽と無量光の事である。
是に目ざむべく「南無」し、是を學ぶべく「南無」し、是を共同生活の上に實現すべく「南無」する事は、人間として無くてはならない心もちである。
私達は誤つた先入觀念に捉はれてはならない。
單なる宗派感情から、其內容をよく闡明もせず、徒らに毛嫌ひして居てはならない。
人間は皆んな「佛」を目ざして生活して居るのだ。
そして佛敎徒は皆んな「佛」に南無して居るのだ。
しかも佛は皆な「阿彌陀」を體現して居るのだ。

道を求むる心

是丈分つたら、皆んな「阿彌陀佛」に南無する氣持を起しても不思議ではない。
誰れでも心の奥に持つて居る望みだからである。
淨土敎に云ふ稱名念佛と云ふのも實は是である。

念佛はこの氣持から、自づと聲に出る人間本然の叫びに外ならない。「抹香臭い」といはれる念佛稱名も、決してそんな一般に考へて居るやうな、くだらないものではない。生々しい人間本心の叫び聲である。

これ丈聞かされても、まだピンと來ないなら、それは先入主に邪魔されて居るか、精神的にひねくれて居るかである。

つまりは求道心が足りないからだ。

求道の心さへ切實であれば、直ちに念佛の信仰に飛び込めない筈はない。

求道心は實に信仰の門を開く鍵である。

然し求道心と云つても、さう大してむづかしいものではない。

即ち、私達の生活の上に、僞りや醜さや惡しきものなどを嫌つて、其反對の眞實なるもの、善美なるものを願ひ求むる心なのである。

畢竟は向上せんとする心を、道德的方面へ向け、そしてそれを更に宗教的に飛躍させたのに過ぎない。

簡單に云へば、向上の要求から現實を強く反省し、信仰に依て理想を實現せしめんとする心なのである。

淨土教では之を「厭欣心」とも云つて居る。

宗教的な向上心の事だ。

願ひ求むる心

宗教的な向上心とは、淨き世界を願ひ求むる心である。

自分ばかりでなく、我れ人共に一處に淨き世界に活きたいと願ふ心である。

云ひ換れば、自分を改造するばかりでなく、周圍をも清めて、理想的な住みよく働きよい世界に、新らしく更生したいと念願することである。

その世界は「めざめ」の世界であり、正義の行はるゝ世界であり、善き人々と睦み

合ふ世界である。皆んな兄弟だ。兄弟として睦み合つて行く世界である。

佛を中心とする世界、阿彌陀を中心とする世界である。

其の世界は死の世界ではない。事々物々皆な生きる世界である。

物生き、事生き、人生くる世界である。

死物なく、死事なく、死人なく、冗物なく、冗事なく、冗人なき世界である。

この人間的理想の世界を願ひ求むる事は、人生にめざむる人の特權であり、喜びである。

深みのある心

然しそれは通り一遍の心から起きては來ない。

此故に本當に自分を深く堀り下げる必要がある。

「俺が」と云ふ自惚れがあつては、仲々本物にはなれない。

俗に「我の强い」と云ふ狀態では、素直な氣持にはなれない。

「我」があり、「自惚れ」がある限り、自己改造を決心するなどは、思ひも寄らないことである。

本當に反省して、深く深く自分を堀り下げて行く時、如何に自分が無力であり、愚劣であるかゞ分る。

卽ち理想を求めて居ながら、理想に邁進する事も出來ない自分、惡いと知り乍ら、誘惑に負ける拙い自分、見得坊の癖に卑怯な自分、弱い癖に强がる自分、醜い氣持を持つて居ながら、善人ぶりたがる自分、慾の深い癖に淡白らしく見せかける自分、自惚れて居る癖に卑下したがる自分、馬鹿の癖に利好ぶる自分、思へば思ふ程、反省すればする程、淺間しい自分がよく分つて來る。

地獄にあると云ふ淨玻璃の鏡は、反省心の具體化である。其淨玻璃の鏡に對した時本當に淺間しい自分の姿がよく寫る。

許されない自分、救はれない自分、これが本當によく分らなければ、向上を望む心も通り一遍のものに過ぎない。

佛教の言葉に「大死一番」と云ふことがあるが、それは本當に「我」が折れた時の氣持を強く云つたのである。

「自分の力では到底救はれない」と本當に自分に死んだ時の氣持である。

淨土教では之を「信機」と云つて居る。

本當に自分に行詰つた時の氣持である。

佛への轉向

何事も本當に行詰れば必ず轉換の途が開ける。

「窮すれば通ず」と云ふ言葉は、勝手に作つた言葉ではない。幾多の經驗から出來た言葉である。

本當に自分に行詰つた時、絶後に蘇つて、心は自然に「佛」の方へ轉向する。

不思議とはまさに此事であらう。

我知らず合掌の氣持が湧然として起つて來る。

佛への合掌。

佛への歸命。

茲に始めて信仰の世界へ入ることが出來るのである。

入信とは佛心へ直面した事である。

初めて佛に遇へたのである。

初めて信仰の火がついたのだ。

初めて光が發見されたのだ。

だから信仰に入つた時は嬉し涙が止め度もなく出る。

此時、私達は喜びにふるへ、喜びの爲に渾身の血は躍るのである。

そして信仰への足取りは一層力強いものになつて來る。汽車が軌道へ乘つたのだ。絶望の深淵から水面へ浮び上つた喜び。

新しく更生した本當の自分を知つた喜び。

人生はこれからだと思ふ力強い喜び。

誠に天地萬物は玆に一新して極樂淨土と化するのである。

一以て貫く至誠の心

それにしてもそれは一以て貫く至誠の心があつたからである。

至誠の心がなければ何事も成就はしない。

至誠の心があればこそ熱心にもなれるのである。

いくら私達が現在に飽足らなくとも、至誠の心が強くなければ、よい加減に諦めをつけて中途で坐折するかも知れない。

そして刹那的な享樂主義の中に落込んで行くかも知れない。

正直に道を求めて苦しむよりは、いつそ面白可笑しく暮した方がよいと思つて、其日其日を放浪し流轉して仕舞ふやうになるかも知れない。

然し、それは永遠に闇をさまよふ旅人でしかない。

喜びもなく、光もない。

力強さもなく、永遠のいのちもない。

此故に至誠心こそは私達を殺さない仙丹であり、靈藥である。

誠に一以て貫いて行けるものは人間の「まごころ」である。

求め求め行くまごころ。

反省し反省し行く「まごころ。」

信じ信じ行く「まごころ。」

「まごころ」こそ、人間になくてはならない仙丹である。

何時の世でもさうだが、世の中で一番不足して居るものは至誠の人である。

世の中で一番要求されて居るものは至誠の人である。

至誠の人は信仰に入り得る人である。

信仰ある人は至誠の人である。

至誠の心は信仰を求め、信仰の力は至誠の人を育てる。

至誠の人ほど頼み甲斐のある人はない。

信仰の人ほど信用の置ける人はない。

「金もいらぬ、名譽もいらぬ、命もいらぬ人程、始末におへない者はない。然しかう云ふ人でなければ、共に語るに足らない」とは大西郷の言葉であるが、それは畢竟信仰の人でなくては、金もいらぬ名譽もいらぬ命もいらぬと云ふ人にはなれない。

此故に信仰の人こそ本當に立派な人になれる人である。

生きてゐる信仰

然し、一度信仰に入れば、あとはどうでもよいと思ふ人があつたら、大變な間違ひである。

それは信仰に入りさへすれば、直ぐ立派な人になれると思ふ誤謬から來た考へだからである。

信仰に入つた時はまだほんの赤ン坊に過ぎない。

生れたての赤ン坊はまだ何にも見えはしない。唯だ乳を吸ふことを知つて居る丈である。

信仰もまたその通りである。當分は信仰をふとらせ、信仰を深める事に專心すべきである。

若し一度信仰に入つたら、もう信仰を深めなくても、あとは感謝の生活でよいと思ふなら、それは死ぜる信仰であつて、生きて居る信仰とは云へない。

信仰の芽が出たからと云つて、それが直ちに完全な一本立ちのものだとは云へないからである。

信仰だつて「生きもの」である。

榮養次第でグングン延びて行くものである。

反對に榮養が與へられなければ、枯死しないにも限らない。

信仰が枯死したら概念執着に化て仕舞ふであらう。

信仰だつて「生きもの」である。

だから榮養を與へることが必要である。

榮養と生殖

榮養とは修養のことである。

信仰を高め信仰を深めることは、信仰が生きて居る限り、自然の欲求として必ず望まれて來るものである。

信根が張り、信力が出て、初めて信仰生活も段々純粹のものになる。

赤ン坊も生きて居る限り、乳を求めて止まないであらう。

信仰も生きて居る限り、養ひの糧を求むる筈である。

即ち信仰に入つても、從來の惡い習慣や惰勢があつて、其生活が中々改められないからである。

周圍に引きづられ勝な弱い自分。

習慣に負かされる愚な自分。

「もつと修養しなければいけない」と痛切に反省されて來るのは、信仰が生きて居る證據である。

タドンがタドンの儘では、タドンたる事を何とも思つて居ないかも知れぬが、一度火がつけば、タドンの全體を眞赤にして仕舞ひたいと云ふ希望が起るに違ひない。

信仰の火が付いた以上、それをもつと燃え立たしめたいと思ふのは、自然の道理である。

更に自然の欲求としては、仲間を殖したくなる事である。

自分一人丈では淋しい。

孤獨では居りたくない。

何とかして共鳴者を得たい。話相手を欲しい。

仲間があれば自然に自分も高められるから、自分を育てる上にも、是非必要になつて來る。卽ち生殖の欲求である。

丁度炭の火が、周圍の炭へ火をつければ、共持ちになつて、火勢が段々强くなり、終に眞赤に燃え盛るやうに、生殖は直に榮養になり、榮養は直ちに生殖力を增すやうになる。

信仰の上に於ける榮養と生殖。

何と不思議な現象ではないか。

敎化と云ふことも、かう云ふ要求から來る現象に外ならない。

友になつて行く無我の心

信仰も段々深められると、自分の榮養よりも、仲間の榮養に全力を注ぐやうになる。兄貴の氣持である。否な、それよりももつと强い「無我」の氣持である。

丁度火種が周圍の炭を火にすれば、自分は灰になつて仕舞つても、遺憾とするところがないと同じである。

それは自分の命を投げ込んでも、本當におしくない本當の仕事が、見つかつたからである。

自分の利益を忘れて、周圍の利益の爲に專心し得る人は尊い。

名工が其藝術品に全心を投込んで惜しまない時、其處に永遠の光りが輝いて來るや

うに、私達が信仰の體現に我を忘れる時、私達の上に永遠の生命が確認される。

信仰の上に於ける「願ふ心」「深い心」「誠の心」の三つは、本當に私達を立派に育てて呉れる重要な要素である。

そして之は互に相關聯して、私達の信仰を螺線的に進めて呉れる原動力である。

信仰―向上求眞（厭欣心）
- 眞實至誠の心（至誠心）
- 深く信ずる心（深心）
- 願ひ求むる心（發願心）

念佛心

第四章　信仰の本尊

條件に依る變化

庭先に朝顏の花が咲いて居る。

朝顏ぐらゐ變化する花はない。

獅子咲、牡丹咲、采咲、臺咲、大輪咲。

そして色々樣々な花の色、葉の色、葉の形。

其變化の妙は、他に比ぶべきものもない位、頗る復雜を極めて居る。

種を蒔けば芽が出る。葉が出る。蔓が出る。

そして花が咲き、實がなる。

然し乍ら、唯だ種を蒔いたから、花が咲いたのではなく、色々な條件が重なり合つて一つに集中したからである。

先づ條件として、土が要る。水分が要る。溫度が要る。そして人の手が要る。肥料が要る。農具が要る。空氣が要る。光線が要る。それ丈でもまだ花は咲かない。

時間が要る。空間が要る。

そしてそれ等の諸條件の適當なる配合が要る。

これ等は其直接的なもので、尙ほ其一つ一つの背後には間接に幾多の諸條件が重なり合つて居るのである。

しかも其間接な關係をすつかり數へ立てたら、恐らく天地間の一切のものに、つながりを持つて居るかも知れない。

一滴の水も、一握の土も、一匙の肥料も、其關係する處は頗る廣い。

農具に於ける鐵の關係と云ふ事丈でも、それを作り上げた人の衣食住、鐵礦を掘り出した人々の衣食住、そしてその衣食住の夫れ夫れの關係など、夫れから夫れへとたどつて行つたら、恐らく無際限かも知れない。

かうした盡くる處を知らぬ關係は、實に縱横無盡に重なり合つて居て、その一つ一つを結びつける糸の織りなす綾は、到底考へも及ばない程、復雜を極め、天地一切互に牽き合つて居るのではないかと想像される。

條件の整理

佛敎ではこの關係を「緣」と云つて居る。

「緣」の糸は一本ではない。實に無數につながつて居る。

「緣」と云ふ言葉には「衆緣」とか「諸緣」とか云ふ意味をも含む。

一切の諸現象は此の無數の緣の糸の變化增減に依て、刻々に變化し推移して行くと考へられる。

だから其條件を整理して行けば、努力次第で、逆緣を順緣に直すことも出來る譯で

ある。

運命を運命として無反省の儘に引きづられず、運命を開拓して、よりよき人生に引き直して行くのが、普通道徳行爲と云はれる行ひである。

丁度人工に依て朝顔の花の色や形を變化させるやうなものである。

然し非常に強い「緣」が一つ働けば、グングンそれに引連られて、人爲ではとても及ばない結果を産む事にもなる。

之を「增上緣」と云つて居る。

信仰上で云ふ他力とは此「增上緣」のことに外ならない。

信仰に依る力は、自力を超越した力である。

超努力的な力である。

全緣綜合の力

凡ての現象は、それが自然現象であらうと、人意的現象であらうと、諸條件の和合工作と、其和合工作の變化とに依て、現象を發展せしめて行くものである。

しかもそれらの諸現象は、互に相牽引して、或は因となり或は緣となつて、色々な渦を卷き起し卷返すのでもある。

此現象活動の全綜合は、實に想像を超越した大きな力を作つて居る。

丁度、人體に於ける細胞活力の綜合が、人間の活動力となり精神力となり、伸いては生命力となつて居るやうに、全宇宙の活動力の綜合は、實に偉大なる力となり、大生命となつて、或は天地星辰を活動せしめ、或は一切生物を産出せしめて居るのである。

之を一種の機械力と見るには、餘りにも有機的である。

天地に充つる活力

卽ち、一切の生物は、草木と云はず、昆蟲と云はず、微生物の極小に至る迄、皆な向上進展を志して居ないものはない。

凡てのものが、「よりよくならん」と努力して居ることは、見やうに依ては、同じ意志を、强弱の相違はあれ、皆な持つて居るからではないかとも考へられる。

また凡ての生物は皆な「いのち永かれ」との祈りを持つて居る。

命永からんが爲に、あらゆる生物は、あらゆる苦心努力を拂つて、「よりよきもの」たらんとして藻掻いて居る。

之は天地を貫き、天地全體に充つる普遍的な意志である。

かうした一切を貫き、全宇宙を包む意志は、唯だ偶然に共通したものとはどうしても思はれない。

一つの異例も特例もない不思議さ。

むしろその事實には或る一種の敬虔な氣持をさへ覺えしめられるのである。

この不可思議な天地のこゝろ。

一切に共通せる不思議な活力。

昔し、釋尊が、菩提樹下に沈思冥想せられた時、此の不思議な事實に驚かれ、思はず合掌して「南無佛」と云はれたと云ふことだが、その成道の朝の氣持は、私達には一種のなつかしさと共鳴とを感ぜざるを得ないのである。

釋尊の拜んだ本尊

この釋尊の「南無佛」を體驗せられたことは、釋尊の一生を支配した大悟であつたのである。

この大悟から色々の教訓が現はれ、樣々な教說が產まれたのである。

教團に入る大切な儀式にしても、この「南無佛」が中心となつて居る。

この「南無佛」こそは釋迦教團の本尊であつた。

釋尊御自身にも本尊として居られたのである。

なぜなれば、それに合掌せられたのみならず、一生涯、それに同化しそれに順應し其實現に努力せられたからである。

これは一般的な本尊として誰にも通ずるものである。

然しそれをもつと適切に表現すれば、前にも云つたやうに「南無阿彌陀佛」になる。

救ひの爲の佛

凡そ惱める者、苦しめる者に取つて、溫かい感情、親切な慰めほど、嬉しいものはない。

「拔苦與樂」の原動力たる慈悲慈愛なくしては、起き得られない私達に對しては、最も力强い「いのち」と「ひかり」との源泉、絕對無限の大慈悲の結晶たる「阿彌陀佛」の抱擁が最も必要である。

此の「救ひ」の本尊こそ、私達に取つて最も重要な增上緣力である。

釋尊の目的

釋尊は「如何に生く可きか」に就て、非常な苦心を續けられ、終に大悟せられたのである。

然しその大悟せられた後の生活は、何を目標とせられたのであらうか。

經典は之を二通りに私達に敎へて居る。

一は卽ち「一大事因緣」を告げんが爲めだと云ふ。

二は「阿彌陀佛の本願」を示さんが爲めだと云ふ。

「一大事因緣」とは迷へるものを悟らしめんとする事である。

固い殼の中に閉ぢこめられた佛性を開示して、佛智に悟入せしめんとする事である。

「また阿彌陀佛の本願」とは、阿彌陀佛の大慈悲の結晶が、四十八の本願となつて、苦しみ惱める人々を救はんが爲に、私達の前に提出せらるべき「念佛」原理の事である。

「一々誓願爲衆生」と云ふ言葉もある通り、本願の數は大した問題ではない。如來の大慈悲が本願意志として、宇宙的な大增上緣となつて、私達を引き寄せんとしつゝある事を、私達に敎へんとしたまふたのが、釋尊の目的だつたと云ふのである。

之を「出世の本懷」とも云つて居る。

阿彌陀佛は果して存在するか

然らばかうした「阿彌陀佛」は果して存在し給ふものであらうか。

是れ大問題である。

信ずる者に取つては問題にならない事であるが、信ぜざる者には大きな謎である。

多數の人々は大概此問題に引つかゝつて信仰に入ることが出來ず、うろついて居るからである。

即ち經典には「十劫の昔、本願を成就せられて、今現に西方十萬億の佛土を過ぎたる極樂世界に、說法し給ふ佛である」と云つて居り、御寺の本堂には金色の木像が、阿彌陀佛として奉安されても居る。

成程、これでは現代人には一寸納得が出來ないのも無理はない。

若し金色の人間があつたら變なものだし、また西方と云つても方角的には中々考へられないから、文字通り承服することは、中々出來ないのである。

永遠に變らざるもの

然し金色とは永遠に變らないことを意味して居る。

即ち無量壽を表現したものである。經典には金剛那羅延身とも云つて居る。

また、西方は太陽の沒する方向で、最後の安定を意味して居る。

佛教で東南西北を發心、修行、菩提、涅槃の四に配當して居るが、それから考へれば、西方は菩提に當る。

菩提は「めざめ」であり、「さとり」である。

また觀法の一なる日想觀は日沒に向つてするのが定である。

印度の日沒はことに美しいとも云ふ。

また印度のアーリヤ民族は、西から移住して來た民族であるから、美しい日沒のあなたをなつかしむ習慣があつたとも云ふ事である。

して見れば、かうした色々の意味に於て西方は最も意味の深い方向でもあらう。

隨つて或は金色と云ひ西方と云ふも、それは信仰的表現として用ゐられたものと解して差支へあるまい。

啐啄同時

況して信仰はものが分つてからのちに、來るものではなく、實は啐啄同時のものである。

信じた時と判つた時とは畢竟同時である。

理解して判つたのとは全然意味の違ふものである。

云はゞ、味得と云ふもので、情意の滿足に依て、理智の働きが屈服する事である。

概念的には判らなかつたものが、宗教的な感情に依て、情意が納得するのである。

既に情意が納得すれば、それが其儘、或る形ならざる形を豫想するに至る。卽ち存在ならざる存在が、新らしく產み出されて來るのである。

場所と方向とは必然なもの

判り易くする爲に例を取つて云つて見やう。

此處に一枚の黑板があると假定する。

之は信仰なき暗黑の精神狀態である。

道を求めて未だ得られざる暗中摸索の時のこゝろである。

今ま其黑板へ白墨で、一つの點を書いたとする。

卽ち信仰と云ふ一現象が心の中に起つたのである。

すると、今迄何も見えなかつた黑板もハツキリして、白い一つの點の形や位置が、私達の目の前に現はれる。

つまり信仰が出來た時、其信仰の形や位置が同時に決定したのである。

その點の打たれた場所は方角であり、其打たれた點は姿である。

卽ち私達に信仰が起つた時、如來の姿が現はれる。

無論肉眼で見るやうな形ではなく、心の眼が納得する姿ならざる「姿」であるが、既に姿が想像される以上、必然的に場所なり方角なりが決定される譯である。

是れ卽ち宗教經驗である。そしてそれは釋尊の說かれた經典の內容と、一致するものであり、また法然上人の體驗せられた信仰と一致する經驗である。

此故に淨土教の信仰で「西方淨土」と云ひ、「眞金色身」と云つたとて、別に不思議とするには當らないのである。

事實、信仰に入る時、素直に、何の顧慮もなく、それが納得されて仕舞ふものである。

それは信仰體驗上の事實である。

私を救ひ給ふ大慈悲身として感ぜられる如來は、相好端嚴の眞金色身としてより外には表現のしやうもない。

それを其儘表現したとて別の仔細はない。

故事も來歷も理屈も何もありはしない。

唯だそれ丈である。

隨つて信仰なき時、場所や方角を論ずるのは何の役にも立たない事である。
信仰なき者に取つては大問題かも知れないが、事實は、入信以前に問題にしてはならない事でもある。

信仰に依つてのみ味ひ得らる

信仰上の事は信仰に依てのみ判る事である。
信仰に依て、如來の大慈悲をシミジミと知る時、言葉には云ひ得ないが、知りたいと思つた私達の要求は、霜の如く消えて、何となく判つたやうな氣持になる。
それは、阿彌陀佛の不思議な大慈悲の一分が味得されたからである。
如來の大慈悲は、天地全體に滿つる緣起の總括であり、正義であり、眞理である。
しかも情意の上には、宛かも親子の情愛の如き溫かさを感じて、涙をさへさそふものである。

だから信仰に入る時を、「父子相迎」と云ふ言葉で表されても居る。
實に「增上緣」の引く力は、愛の力以上である。
況して阿彌陀佛は本願の上に成就せられた如來である。
卽ち本願意志は其儘阿彌陀佛であり、阿彌陀佛は其儘本願力である。
然るに本願は、宇宙に充てる根本的な綜合意志力であるから、此十方世界に光明遍照し給ふ本願意志の存在が納得せらるゝ限り、其人格的表現たる阿彌陀佛の存在が、是認されない譯はない。
つまり、本願の信ぜられる限り、阿彌陀佛の存在は疑ひもなく信じられる。

第五章　信仰を得る道

考へるよりは實踐

林檎の味をいくら研究して見ても、喰べて味ふものにはかなはない。

信仰も亦その通りである。

宗教の眞髓を知るには、教理の研究よりも信仰を獲得する方法を實踐する方が早い。

近頃の人は、實行よりも、先づ以て理屈を知らうとするが、誠に惡い癖である。

丸で、頭でつかちなものになりたがつて居るやうなものである。

佛のことを兩足尊とも云ふ。

卽ち、知と行との兩足が勝れて居る事を云つたのである。つまり實行の伴つて居ることを現はしたものである。

準備行動としては聞いたり考へたりすることも必要であるが、唯だ聞いたり考へたりした丈では信仰に入れるものではない。

どうしても信仰上の行儀を實行しなければならない。

つまり人間本心の要求を聲に出すことである。

即ち、稱名念佛することである。

念佛は、阿彌陀佛に南無することである。

其の南無する心を、聲に表すことが念佛である。

聲は行爲の決定

人間の行爲は體と口とである。

身體を動かすのは臆臆であるが、口を動かすのは至極簡單である。

然し簡單ではあるが、其聲を聞けば、其精神內容も大概を知り得る重要なものでもある。

また私達が決定した意志を表示し、若しくは意志を決定せんとする時、必ず聲を用ひる事から考へても、聲は決して簡單なものとして、輕く取扱ふべきものではない。

口から禍ひも起り、爭ひも起る。

口から幸せも起り、爭ひも止む。

此故に私達の行爲の中、聲を出すことは、一番簡單ではあるが、一番大切な事である。

淨土教が信仰上の行爲として、聲に出す稱名念佛を重大視するのも、誠に尤もな事で、また誠に自然であると共に實際的なものでもある。

信仰なき者も稱名に依れ

「南無阿彌陀佛」と云ふ言葉は前にも云つたやうに、私達の最も根本的な要求を、最

も短く、最も云ひ安くしたものだから、信仰なき者も、其要求の心を聲にあらはして一心に唱へれば、何時か屹度信仰に入る事が出來る譯である。

此故に念佛は、自然に信仰に入らしむ最勝の法である。

然し倦きてはいけない。何事も倦きが來て、其の倦きに負けては成就するものではない。

私達も信仰を得る迄は、決して止めないと云ふ決心を以て、一生懸命に念佛を續けて行けば、必ず信仰に入る事が出來る。

それは丁度火をおこすのに火吹竹で吹くやうなものである。

折角おきかゝつた火も、中途で起すのをやめれば、やがて消えて仕舞ふかも知れないやうに、折角念佛しかけても、よい加減で中止するやうなら、決して物になるものではない。

徳本上人の歌にも

藥鑵坊火を引く故にさむるなり絶へず懸け置け法の火の上

とあるやうに、信仰を得る迄絶へず念佛すれば、やがて喜ぶ日は必ず來るものである。

また一心に佛に呼びかけることは、私達の心を素直にして、信仰に入り易い素地を作り上げて呉れる。

既に素地が出來れば間もなく念佛の種が芽を出し初めるであらう。

南無のこゝろ

南無阿彌陀佛の「南無」は「どうぞ」と云ふ私達の要求でもある。

子供が母親の名を呼んで、母親の愛を求めるやうに、南無のこゝろは如來の慈悲を求め、如來の力を要求する氣持である。

こんな話がある。

旅人が日暮て或る大きな川邊にさしかゝつた。渡しを求めたけれども船がない。偶〻通りかゝつた人に尋ねると、渡守は向岸に居るから大きな聲で呼べば、船を持つて迎ひに來て呉れるとの事であつた。

旅人はそれを聞いて「船頭さあん」と叫んで見たが返事が聞えないので、更に聲を張り上げて再び叫んで見た。然し返事は聞えて來ない。「さてはあの人にだまされたのか」とも思ひ惑つたが、さりとて外に方法もない。仕方がないから大聲上げて再び三度續けざまに船頭を呼んだが、それでもまだ一向音沙汰がない。

そこで旅人は殆んど死物狂ひの氣持で聲をからし乍ら、「船頭さあん、船頭さあん」と叫び續けた。するとかすかに「おーい」と云ふ聲が聞えた。「ヤレ嬉しや、船頭が居て呉れた」と旅人は喜びの聲を上げて更に「船頭さあん」と呼び續けたと云ふ。

之は一つの譬へに過ぎないが、私達の「南無」と叫ぶこゝろをよく表はした話である。

もし倦きが來たら

然し私達がかうして呼び續ける時、もし倦きが來たり、惑ひが出たりしたら、其倦きを乘り越え、惑ひを屈服させて仕舞はなくてはならない。

もしそれでも倦きが來るやうなら、經典を讀むのもよい。

また阿彌陀佛のことを考へるのもよい。

そして阿彌陀佛を禮拜し、讃歎し、供養するのもよい。

之は丁度御飯に添へる副食物のやうなもので、念佛に勇みをつける助業である。

然し助業は何處迄も助業にすぎない。信仰を得る爲にも、信仰を深める爲にも、一番直接なものは、何と云つても稱名念佛の專心である。

だから稱名のことを正定業とも云つて居る。

經典にも「名號を執持すること、一日乃至七日一心不亂なれば」と云つて、或る期

間を限つて信仰に精進することを奬めて居る。

之を俗に「お別時」とも云ふ。

法然上人が「信仰を策勵する爲に、時々別時を行ずべし」と云つて居られるのも、それである。

無論、之は篤志の人にすゝめることで、其日其日をかせがなくてはならぬ人なら、朝なり夜なり、たとへ僅の時間でもよいから、其時間丈念佛に專心して貰いたいものである。

それも信仰に入る迄の事で、信仰の要は平生生活を、本當に樂しく安らけくするにある事は云ふ迄もない。

人生の目的に就て、はつきりした自覺が出來、自分の生命に就いて解決をつける迄の修養法として、或る程度の熱心さがあつてもよいではないか。

どんなに急がしい人でも、一日に三十分や一時間の餘裕のないことはない筈である。

暇を惜しんで信仰なきまゝに、くだらなく人生を棒にふつて仕舞ふよりも、思ひ切つて或る時間を之に捧げる事は、自分に取つて最も忠實な事である。

一度、信仰の火が燃えついたら、もうしめたものだからである。

入信の因緣

また信仰に入るのに、人に依て時間と形式との相違がある。

之を「頓機」若しくは「漸機」と云ふ。

「頓機」と云ふのは急激に精神轉回をする人のことであり、「漸機」とはジリジリ信仰的に變つて行く人のことである。

然し自分には、自分が頓機であるか、漸機であるか、分るものではない。

どうした表裏の瓢簞から駒が飛び出さないにも限らない。

御話を聞いた丈で、グツと心に答へるものがあるかも知れず、一聲「南無阿彌陀佛」と叫んだ丈で、強いインスピレーションがあるかも知れず、どんなことが機緣になつて精神轉換しないにも限らない。

何事も因緣和合の緣起である。

だから兎に角、一度やりかけたら、目的を達する迄、敬虔な氣持で、熱心にやるべきである。

之を淨土教では「恭敬修」、「無間修」、「無餘修」、「長時修」と云つて居る。

「恭敬修」とはまごゝろをこめること、「無間修」とは倦きないこと、「無餘修」とは迷はないこと、「長時修」とは何處迄もやり遂げることである。

懺悔の涙は信田の肥料

また人に依ては、どうしても熱心になれない事がある。

それは「自分の心が頑迷だからだ」と思つて、一心に懺悔するがよい。

懺悔の涙は信仰の田を肥やす良肥である。

また心水が清澄でなくては信仰の月影は宿らない。

池の水己が心に似たりけりにごり澄む日の定めなければ

と云ふ法然上人の歌もあるやうに、私達の心はにごり勝である。だからその濁りを少なくする爲にも懺悔するのがよい。

「懺悔すれば心清淨なり」と云ふ言葉もある。

またいくら中空に如來の明月が輝いて居ても、こちらの心の眼が、閉ぢられてあつては、見える筈がない。

また壁の向ふに月があつたら、いくら目を開いても見えはしない。

だから懺悔の涙で其壁をとかし、こちらの目を開かしめなくてはならない。

それでもまだ見えなければ、まだ雨戸が閉ぢられてゐるからであらう。

それなら尙ほ懺悔禮拜して其雨戸を取り去らねばならぬ。
それでも月が見えなかつたら、まだ障子が邪魔をして居るのかも知れない。
一心に念佛して障子の紙を破るがよい。

天地悉く皆な新らたなり

求むる心さへ切實なれば、一心に懺悔し、一心に念佛することも出來る筈である。
此故に求道愈々切なれば、必ず信仰に入る事が出來る筈である。
其時の喜びはどんなであらう。到底何物にも比べることは出來まい。
金錢でも買へず、名譽でも買へない喜びである。
誠に信眼一たび開くれば、天地悉く喜びの世界と變じ、萬物は皆な新しく生き生きとして見えるに至るであらう。
此時、新天地は希望に滿ち、樂園は光りに充つ。
暗黑な世界は光明の天地となり、苦悶の世界は安樂な淨土となる。
悠久たる新天地は、花咲き鳥唱ふ春の如き、生き生きとした活動の舞臺となつて、
私達を長閑な朗かな別人の如き躍り手として迎へて呉れるであらう。
金にも淫せず、名譽にも溺れず、淡々として流水の如き無我高潔なる人格を作り、
洋々として春の海の如き廣闊なる大道は、且々として前方に開ける。
私達は望みに滿てる若き騎士の如く喜びに充たされ、樂しみに眼を輝かしつゝ、力
强き足取を以て、人生の門出を踏みしめるに至るであらう。
偉大なる信仰の世界。
それは獨り信ずる者のみの知る別天地である。

- 入信の因緣
  - 主因
    - 性因
      - 遠因—求道心（佛性）
      - 近因—素質遺傳（宿因）
    - 種因—佛の名號（種子）
  - 助緣
    - 遠緣—增上緣—宇宙綜合力（本願力）
    - 近緣
      - 親緣—念佛稱名の聲（正定業）
      - 近緣—師及環境（善知識）

- 念佛行儀
  - 尋常行儀（日常生活の念佛）—平生
  - 別時行儀（信仰增進の念佛）—特別

- 五種正行
  - 一、讀誦正行（經典を讀み講話を開く）
  - 二、觀察正行（よく思索し佛を觀察す）
  - 三、禮拜正行（禮拜し恭敬し反省し懺悔す）
  - 四、稱名正行（佛の名を呼び一心に南無す）
  - 五、讃歎供養正行（佛德を讃歎し孝養を盡す）
  - 助業
  - 正定業

- 四修
  - 一、恭敬修（まごゝろを込めること）
  - 二、無間修（倦きないこと）
  - 三、無餘修（迷はないこと）
  - 四、長時修（何處迄もやりとげること）

信仰讀本（完）

昭和九年十一月五日印刷
昭和九年十一月十日發行

信仰讀本　定價貳拾錢

著者　中村辨康　東京芝區芝公園五號地拾番
發行者　眞野正順　東京市神田區神保町三丁目十番地
印刷者　春山治部左衞門　東京市芝區芝公園地

發行所　增上寺出版部
振替東京一五四五四
電話芝(43)四四四五
四四六

受うけがたき人身をうけ。あひがたき仏法あひ
あひしかたき道ふを發しかたき。輪廻乃里をはなれ
浄土に往生をねがはゝ。雜毒の中のこゝろをすて欲
ひの中をはなれ愛ふかきこゝろをはなれまことに六
塵の境にまよはしく。四相ふうしさらんとする。
違順乃事によつてはゝ。ふかく慢愛法
ふかをおこし。冥きこゝろをはなれ入ふかきあはれみ
をもつて限なき衆生を導き摂希まん人も阿

終